

## シンポジウム趣旨説明

## 「旅・観光・歴史遺産」研究の概観

岩鼻通明・原淳一郎

2014年度大会において、「旅・観光・歴史遺産」と題したシンポジウムが、長崎外国語大学を会場として開催された。これまで、本学会においては、1年目は共同課題に関する研究発表を会員から募集し、2年目に共同課題に関するシンポジウムを開催するというかたちで、実施されてきた。

ただ、今回は共同課題のテーマについての議論を深めるために、3年がかりでの取り組みとなり、1年目は新潟大学で開催された第55回大会において課題発表が行われ、2年目は砺波市文化会館で開催された第56回大会において課題発表が行われた。

その成果は既に共同課題報告として『歴史地理学』55巻1号に、渡部浩二「江戸時代の旅と越後の名所」、安藤哲郎「京都の歴史遺産と旅」、高木秀和「南信州・遠山郷における歴史的文化的資源の活用」の各論文が、『歴史地理学』56巻1号に、鈴木晃志郎「住民意識にみる公共事業の「神話」性とその構成要因」、大平晃久「長崎出島における復元整備の経緯と問題点」、天野宏司「熱海におけるコンテンツ・ツーリズムの普及」、佐伯安一「近世中期における庶民の伊勢・京参り」の各論文が収録されている。

また、本学会の共同課題をさかのぼってみれば、2005年1月刊行の『歴史地理学』第47巻1号が「宗教文化の歴史地理学」特集号、2007年1月刊行の『歴史地理学』第49巻1号が「地域文化遺産としての歴史的景観」特集号として編集されている。前者では、伊勢講

や信仰圏、門前町などに関する論文が、後者では、世界文化遺産や、文化的景観、伝統的建造物群保存地区などに関する論文が収録されており、今回の共同課題に密接に関連するテーマが盛り込まれている。

さらに古くは『歴史地理学紀要』第3巻「流通の歴史地理」1961年、第16巻「交通の歴史地理」1974年、第28巻「情報・交通の歴史地理」1986年、においても、交通に関わる論文が収録されているが、この時点では「旅」に視点を置いた研究は未だ出現していない。歴史地理学において、旅に関する研究が盛んになってくるのは、1980年代半ば前後からであるといえよう。

さて、本シンポジウムの構成について、以下に紹介したい。以上で述べたような1980年代以降の「旅・観光・歴史遺産」に関する研究の進展と、それによって具体的に何が解明されたのか、将来的な展望と課題は如何なるものか、といった諸問題に関して話題提供すべく、オーガナイザーの2人は、5名の実績を積んだ研究者に報告を依頼した。報告者は必ずしも歴史地理学の専門家にはこだわることなく、このテーマに関わる幅広い研究者にお願いした。

また、研究報告に対するコメンテーターについては、2～3名の報告について1名がコメントすることとし、オーガナイザーを含む3名に依頼した。いずれも、その研究分野に関する深い造詣を有した研究者にコメントをお願いした。

さらに、報告・コメントが終了した後は、総合討論に入るが、報告終了時に若干の時間的余裕があれば、簡単な質問を受け付けることとした。総合討論では、1時間弱の質疑応答を行い、最後にオーガナイザーが、シンポジウム全体の総括を行うという進行を目標とした。

次に、各報告の位置づけと意図について、以下で簡単に説明したい。

①浅川泰宏報告「巡礼が刻む道と時：1980年代以降の研究史と展望」に対しては、巡礼研究者である文化人類学者の視点から、歴史地理学のみならず、広く歴史学、社会学、民俗学、宗教学、人類学などの研究史を総括しつつ、巡礼空間に着目し、1980年代半ば以降に盛んとなる歴史地理学的研究の中心を担った研究者のひとりである故田中智彦の業績の再評価を織り込んだ内容で依頼した。田中智彦が急逝して遺著の刊行から10年目になる本シンポジウムは彼の再評価にふさわしい場であるといえよう。

田中智彦は「歩いて学ぶ中世史」を掲げた戸田芳実の門下で、ミクロな視点からの巡礼路復元を積極的に試みた。1980年代に立ち上がった葛川絵図研究会においても、田中は現地調査で精力的に活動し、白山参詣路調査では、秘所として知られる山頂直下の朝日の岩屋へ唯一到達したことが思い出される。熊野古道調査でも、小山靖憲とともに現地踏査を重ね、その成果は「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界文化遺産登録実現に大きく寄与した。3名の先達が、いずれも鬼籍に入った今、このシンポジウムが再評価の場となることを祈念するものである。

②西海賢二報告「霊山登拝の旅日記に人生儀礼を読む」に対しては、日本近世史と民俗学の分野で山岳信仰研究に関わる膨大な研究業績をあげてきた視点から、従来あまり研究のみられなかった富士山への参詣の実態に関して、残された道中日記の記載から復原し、

そこに秘められた民俗文化を読み解く内容で依頼した。伊勢参宮の旅日記は、各地に膨大な史料が残されていることもあって、早くから着目されてきたが、霊山登拝の旅日記は史料上の制約もあって、特定の霊山の分析に限られてきた。世界文化遺産登録が、ようやく実現した富士山を対象として、歴史地理学的な参詣路の分析に加えて、民俗学の立場から人生儀礼としての側面に注目した点は、今後の他地域の霊山との比較研究に展開するものとして期待される。

そして、両者に対するコメントは、オーガナイザーのひとりであり、関東の山岳信仰と寺社参詣に関する著作を相次いで刊行し、目下は飯豊山信仰と人生儀礼の関わりについて研究を進めている近世宗教史の研究者である原淳一郎に依頼した。

③平山昇報告「社寺参詣と鉄道一大正～昭和戦前期における関西私鉄・国鉄と「聖地」参拝」に対しては、日本近代史の分野で鉄道と参詣の関わりについて精力的な調査研究を進めつつある若手研究者の視点から、いわゆる国家神道と鉄道会社の乗客獲得戦略が如何なる関係を有していたのか、といった内容で依頼した。関西においては、従来の研究では阪急電車の経営戦略に関心が集中してきた傾向がみられたが、むしろ阪急以外の鉄道において、鉄道輸送の閑散期対策として初詣や御陵巡拝経路が設定され、私鉄と国鉄の競合により、参詣における鉄道利用が浸透し、とりわけ関心の薄かった知識人にも明治天皇の死を契機として浸透が進んだこと、その背景としてのナショナリズムとのかかわりは決して必然的とはいえないこと、といった内容で依頼した。

④荒山正彦報告「近代メディアと外地/植民地ツーリズムの空間」に対しては、第2次大戦前の日本が支配した植民地と観光の関わりについて、歴史地理学・文化地理学的視点から実証的な調査研究を進めてきた研究者の

視点から、外地ないし植民地を対象とした近代観光が、どのようなメディアに依拠しながら展開したのかという問題について、公的機関などから刊行された旅行案内書や都市案内図を題材に読み解く内容を依頼した。

そして、両者に対するコメントは、文化地理学および民俗学の分野で活躍し、植民地観光についての研究実績もある内田忠賢にお願いした。

⑤山元貴継報告「韓国における世界文化遺産登録—歴史的地域の取り扱いをめぐって—」に対しては、歴史地理学・文化地理学的視点から、韓国の事例について、長年にわたり現地調査を継続してきた研究者の視点から、韓国の世界文化遺産登録の現況と特徴について、当初は宮廷や王陵といった文化財がされてきたが、近年新たに登録された人々の居住の場としての2ヶ所の民俗マウルに関して、いかなる特徴や課題が存在するのか、といった内容で依頼した。

⑥島津忠裕・鷺崎俊太郎報告「世界文化遺産登録と観光まちづくり（鹿児島）」に対しては、実践者（島津興業副社長・鹿児島藩島津家の末裔）および経済地理学者の視点から、「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関

連地域」の構成資産の一角を成す、鹿児島市における構成資産候補の現状と課題について、2次交通ターミナルとしての鹿児島駅の重要性を指摘し、その周辺整備が鍵を握るといった内容で依頼した。

⑦松井圭介報告「長崎の教会群と宗教ツーリズム」に対しては、宗教地理学の代表的な研究者であり、近年は宗教と観光の関わりについての研究を進めており、開催地の地元である長崎県の教会群に関する著書を既に出版している研究者の視点から、世界文化遺産登録運動を、行政側と宗教側が政教分離の原則の中で、どのように折り合いをつけて対応していったのかという問題について、時間軸を背景に分析するという内容で依頼した。

そして、3者に対するコメントは、歴史地理学の研究者であり、かつ文化庁において、この分野の担当官でもある鈴木地平にお願いした。

以上の報告を踏まえて、総合討論の質疑応答では、聴衆からの積極的な議論への参加を呼びかけた。討論の後、オーガナイザーから今回のシンポジウムの簡単な総括を行い、シンポジウムを締めくくった。

（山形大学・山形県立米沢女子短期大学）